

西の湖および伊庭内湖におけるホンモロコ稚魚の生息状況

寺井章人・杉江天音

1. 目的

西の湖および伊庭内湖の両内湖は北湖湖岸に比べ春先の水温の上昇が早く、エサとなるプランクトンも豊富で、ホンモロコ稚魚成育の場として優れているとされている。また両内湖で成育した稚魚が琵琶湖へ移動し、漁獲に貢献していることが過去の研究から明らかになっている。そのためこれら両内湖でのホンモロコ稚魚の生息状況のモニタリングは本種の資源評価に極めて重要であることから、当场では下記の調査を継続的に実施している。

2. 方法

2024年5月7日から7月2日にかけて、概ね2週間に1回の頻度で調査を実施した。西の湖3定点、伊庭内湖3定点（水草の繁茂状況等により欠測定点あり）を設け、ビームトロール網（小型底曳き網）によりホンモロコ稚魚を採集し、尾数を計数した。ビームトロール網の開口幅(3m)×曳網距離(m)で曳網面積を算出し、各定点のホンモロコ稚魚の面積当たり採捕尾数(尾/m²)を求めた。それらの平均値を各内湖の稚魚生息密度の指標として過去の状況と比較した。

3. 結果

西の湖では5月後半に非常に多くの稚魚が採捕された(図1)。伊庭内湖では5月前半から6月前半まで多くの稚魚が採捕された(図2)。両内湖とも過去と比較しても多くの稚魚が採捕できており、2024年の稚魚発生状況が良好であったものと推察される。しかし、年により内湖における稚魚の生息状況には大きな差が見られることから、その要因を解明し、精度の高い資源評価の実現を目指す必要がある。そのためモニタリングの継続実施は重要である。

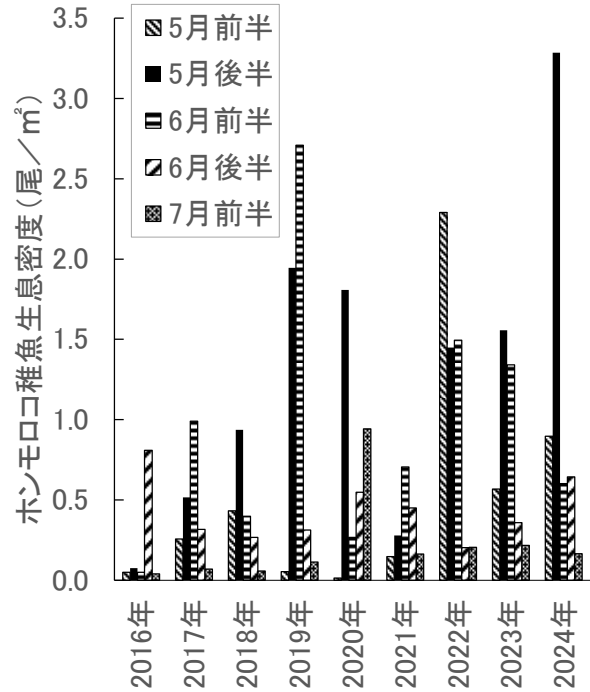


図1 ホンモロコ稚魚生息状況（西の湖）

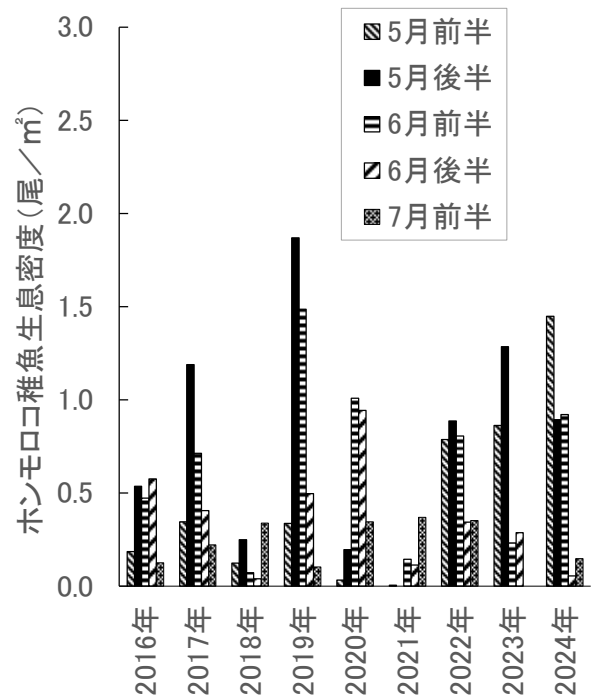


図2 ホンモロコ稚魚生息状況（伊庭内湖）